

# 東京 物語 散歩

No.202

新宿中央公園を背にするようにそびえる、特徴的な形のツインビルがあります。左側のビルがハイアットリージェンシー東京。右側の小田急第一生命ビルと共通する煉瓦色がとても美しいホテルです。煉瓦といえば、このホテルのバー「オールドヴィー」では、かつてこの地にあった淀橋浄水場の、建物の煉瓦を利用した壁材が使われていると、ホテルの方からうかがいました。

半村良の小説『高層街』(1980年)冒頭の時代設定は1980年。ホテルのビルができあがった年です。作中では、当時の名称である「ホテルセンチュリーハイアット」として登場します。ホテル内の店名も実名です。それはこの物語自体が、実在の

## 半村良『高層街』ハイアットリージェンシー東京

### 都会人のためのクリニック

人物をモデルにしていることと無関係ではありません。ただ、ここではあくまでも小説として、物語をご紹介することにします。

物語はまず、ホテル内の店を利用する人たちの描写から始まりますが、次第に描写の焦点は、大町という1人の男に絞られていきます。

大町は私立病院の外向医をしつつ、総理大臣外遊の際の随行医をも務めるという人物でした。華やかにみえる仕事ですが、彼には別の夢がありました。新しい都市型医療を展開したいという夢です。対

象は大都会の第一線で活躍する人たち。多忙を極め、体を酷使しがちな人に、予防医療を行うクリニックを作りたいと強く望んでいたのです。

幸い事前調査も順調に進んでいきました。いよいよクリニック開業の決意をすべき時です。

クリニックはホテルに隣接するビルの中に作られることになりました。熱意ある若いスタッフもそろいました。しかし、初めての試みを実行しようとする大町の不安はなかなか消えません。

ホテルの名称同様、ホテル内の店舗にも時を経ての変遷が見られます。ただ、前述したバーの名は、作品に描かれた当時の名と全く同じです。



ハイアットリージェンシー東京(左)と小田急第一生命ビル(新宿区西新宿2丁目)

